

こだま

第176号
2012. 1

ISSN 0915-8782

金沢大学附属図書館報 “こだま”

<http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp>

CONTENTS

巻頭言	1
シンポジウム／ワークショップ	3
CiNii BooksとJapanKnowledge+	4
附属図書館蔵書紹介／とぼらニュース	5
ラーニング・コモンズKULic-α活動報告	6
金大生のための読書案内	7
トピックス	8

巻頭言

環境学コレクションの構築に寄せて

附属図書館長 柴田 正良

ほぼ確実に、図書館長であるというだけの理由で私は創基150年記念事業の準備委員長を務めることになり、ほぼ確実に、その委員長であるというだけの理由で「アジア5大学学長フォーラムin金沢」の実行責任者となったのですが、そのフォーラムで3度に渡り「名誉ある挨拶の刑」を受けることになったのはまったくの偶然だったと思います。このたび、「環境学コレクションの構築に寄せて」自分の考えを述べさせて頂くに当たり、少しばかり、その時の「挨拶」の中身を振り返らせてもらうことにしました。というのも、その「挨拶」のテーマは、私の中では環境の話と密接につながっている「人間の有限性とその受容」だったからです。

3度の閉会の挨拶にはさすがに閉口したので、私は、自分の専門である哲学の3つの重要な概念「可能性」、「現実性」、「必然性」に3回の挨拶の展開を託しました。つまり、それらを種に3つの小さなお話をこしらえて、ちょっとした連載ものファンタジーのようにフォーラムの趣旨と意義をみなさんに訴えようとしたのです。その話は、5つの小さな惑星が直面した災厄という「現実」から始まります。

Today, I will speak about "actuality" first. Please imagine that there are five planets in the dark space of the universe, far away from the Galaxy. The first planet is called "Dragon," the second "Tiger," the third "King's Elephant," the fourth "Golden Turtle," and the last "Phoenix." But these planets are all suffering terribly, and will die out some day in the future if they stay as they are. The causes of this disaster are the decadence of civilization, epidemics of disease, gigantic natural catastrophes and so on. Those planets cannot communicate with each other, because they speak different languages.

This is the "actuality" of those planets. They

may not have enough time to survive this disaster. What can they do to overcome these troubles? They think it is due to their "limitations," or "finiteness." And they turn to something infinite, "Universality" itself that requires them to abandon their each other's differences completely. Will this so-called "transcendence" without diversity appear in their world? And bring them any hope?



11月12日、石川県立能楽堂で

もちろん、その災厄を克服する「可能」な道がそれぞれの有限性（差異性）を一気に超越する何か絶対的な言語のようなものにあるのではなく、互いの有限性（多様性）をありのままに認めあう地道な翻訳の努力にしかないことを悟り、それを実行するのがわれわれに課せられた「必然」だ、というのがこのお話に込められたメッセージでした。

But I think today's forum taught us the following. What they should do is to become one with others toward the future, by recognizing and accepting each other's differences. That is to "unite for the future" with diversity. Here I believe they, indeed we could have a fruitful "possibility" where one lives with his or her limitations straightforwardly without seeking something infinite in vain.

締めくくりの3話目は省略しましょう。ところで、このお話のテーマである「有限性」を実感するのは、今日、私たちの文化やコミュニケーションの場面だけではありません。まさしく、人類の存在そのもの



1月23日、金沢大学創基150周年記念「講演会・シンポジウム」シリーズ特別回として、平成23年度附属図書館環境学コレクション・シンポジウム「環境との調和を目指す車社会とは」を開催しました。内容は次号でご紹介します。

と、それを可能にしている地球そのものが有限なのですが、私には、その有限性を正確に捉えきれないところに環境問題の根があるように思われます。

「地球は有限である」。これは頭では分かっている、これまで強く実感されることになかった観念ではないでしょうか。しかし、20世紀末からの急速な交通・通信手段の発達、市場経済のグローバル化、人口のとどめを知らぬ急増などによって、私たちは、自分たちの乗っている宇宙船「地球号」が無限に大きいわけではなく、やや窮屈になり始めた小さな乗り物にすぎないと思知らされるようになりました。今日、どこかの地域で巨大な自然災害が起きれば、あるいはどこかの国で感染症や環境汚染が発生すれば、その結果はやすやすと人為の境である国境を越え、隣り合う他の地域や国に甚大な影響を及ぼすでしょう。それを私たちは、2011年3月に身をもって経験しました。もはや地球は限界を持たない無限の広がりなどではないことを、私たちは肌で知ったのです。

しかし、この地球は、実はテレビ・コマーシャルで何度も繰り返し囁かれているような、「私たちが優しく守ってあげる自然」などといったヤワな存在ではありません。人間を含めた生物すべてに対して、地球が、自然法則に従った冷徹冷酷な歩みをこれから何十億年にも渡って続けていくことも、私たちは知らなければなりません。

「人類もまた有限である」。たとえば、NHKの番組『スーパーコンチネント～2億5千万年後の地球～』は、地球に対するこの意味での人間の有限性を明確なストーリーと豊富なイメージで描いてくれています。それによれば、これから2億5千万年後にやってくると科学者たちが予想するパンゲアの再来、スーパーコンチネント（超大陸）の形成は、生物すべてを死滅させるかもしれないような極めて過酷な地球環境を地上に出現させるはずで、まず氷河期が再来し都市を崩壊させ、プレートの移動が新たな大地の隆起と沈下を引き起こして、文明のすべての有形の証を地層の下深くに葬り去ります。プラトンの哲学書も、マチスの絵画も、あなたの思い出のワイングラスもその例外ではありません。超大陸の中では巨大な死の砂漠が広がり、大陸周辺の酸欠した海では猛毒の硫化水素が海洋の生物のほとんどを死に至らしめるでしょう。さらに超大陸の分裂まで生き残る生物がいたとしても、信じられないほどの大規模・長期間にわたる溶岩流（洪水玄武岩）の噴出によって

地層奥深くに眠っていた石炭とメタンに火がつけられ、毒ガスでやられるか、地獄のような熱波で焼かれることでしょう。

これは、私たちを打ち砕くような真実かもしれませんが。このような巨大なレベルで地球の寒冷化や温暖化がいずれ到来するならば、現在の私たちの環境問題への取り組みはそもそもどんな意味をもっているのでしょうか？ いやそれどころか、人類が何かを創り出すことそれ自体が…？ しかし、問題は時間です。今から2億5千万年前は恐竜の世界でした。哺乳類の祖先は小さなネズミのような姿でようやく存在していたにすぎません。人類の祖先がチンパンジーやボノボの祖先と別れたのは600～700万年前くらいと言われていますが、イブ仮説によれば、現生人類の祖先がアフリカに登場したのはたった16万年前くらいようです。人間が生産活動によって二酸化炭素の濃度を急激に上げ始めたのにいたっては、たかだかここ数100年間の話です。したがって、この時間スケールから考えると、人間が本当に愚かな種族ならば、超大陸の形成どころかそれよりずっとずっと前に、人間に固有な能力をフルに働かせる前に、自分たちが引き起こす環境破壊のせいで絶滅してしまうでしょう。その能力とは、進化において人間にのみ許された想像と思考の能力、「可能な生存の方法」を考え出す能力に他なりません。

この意味で環境問題における「人間の本当の有限性」とは、こんなにも巨大な時間と空間のスケールにおいて、人間と地球の運命を生き生きとイメージし、自分たちの行動の結末を冷静に考え抜くことの難しさにあるのではないのでしょうか。ところが、こうしたイマジネーションはどうにも脆く、目先の利益を求める欲求はあまりにも自然で、あまりにも抑えがたいというのも真実です。冒頭の「挨拶」に登場した5つの惑星はすべて「病んで」いました。その病は、孤独な戦いによっては克服することはできません。この戦いには、他の人々との連帯と協調が必要です。

私たちは、一人ではとても歩き通せそうもない「賢明な種族」への道を、みなさんと一緒に歩いて行こうとするものです。私たちが始めた「環境学コレクション」というささやかな活動への参加を、それこそ人類の一員としての市民や企業や自治体のみなさんに広く呼びかける次第です。



環境学コレクションについて、図書館Webサイトに次の2つのページを作成しています。①は環境学コレクションについて、②は環境学コレクションの整備及び関連活動における連携の呼びかけについてです。パンフレットもダウンロードできます。併せてご覧ください。

- ①<http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp/env/collection.html>
- ②<http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp/env/tieup.html>